

思考を止めない、究極の実用配列

Dvorakベースの和文入力方式
「AOUR」の全貌と習得ガイド

日本のPCユーザーの9割以上が抱える「無意識の非効率」

標準的なローマ字入力（QWERTY）は英文タイプ用に設計されており、和文入力においては２つの重大なコストを発生させています。



QWERTY配列での和文入力（物理的な無駄）

物理的疲労（指の移動距離）

頻出する母音がキーボード全体に散在しており、片手のみに打鍵が偏る「片手連打」が多発。長時間の入力で手首や指の疲労が蓄積します。



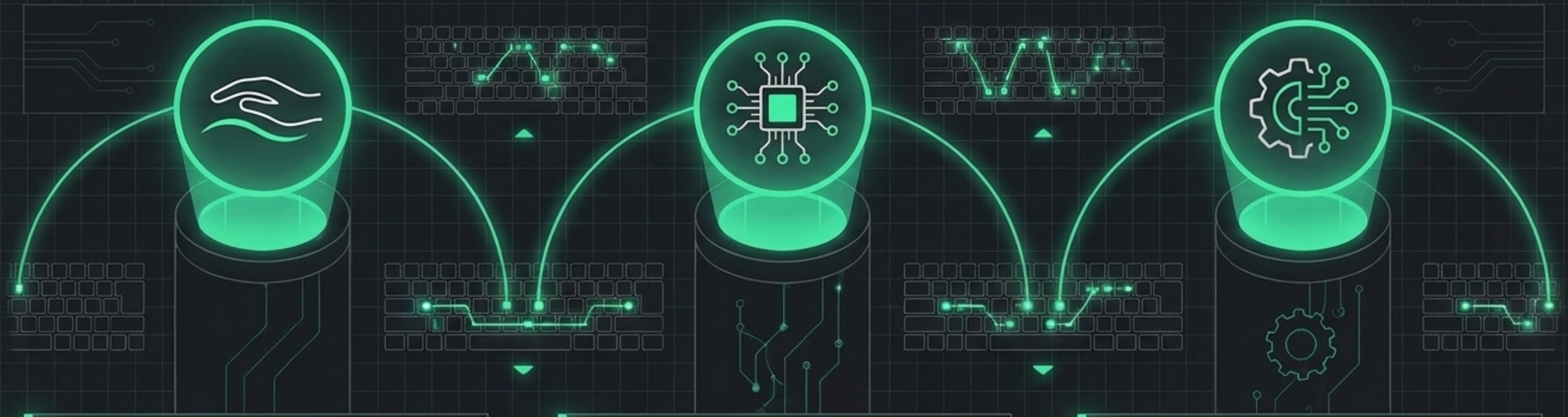
認知的疲労（不規則な運指）

打鍵ごとの指の移動パターンに一貫性がなく、思考のスピードに対して指の動きがボトルネックとなります。



ハードウェアを変えずに、ソフトウェアの規則を最適化する

AOURは、現代の執筆環境に完全に適応するために設計された、3つの哲学に基づく実用的な入力アーキテクチャです。



Dvorakベースの疲労軽減

母音を左手ホームポジションに集中置し、日本語入力に最適な「左右交互打鍵」のリズムを生み出します。

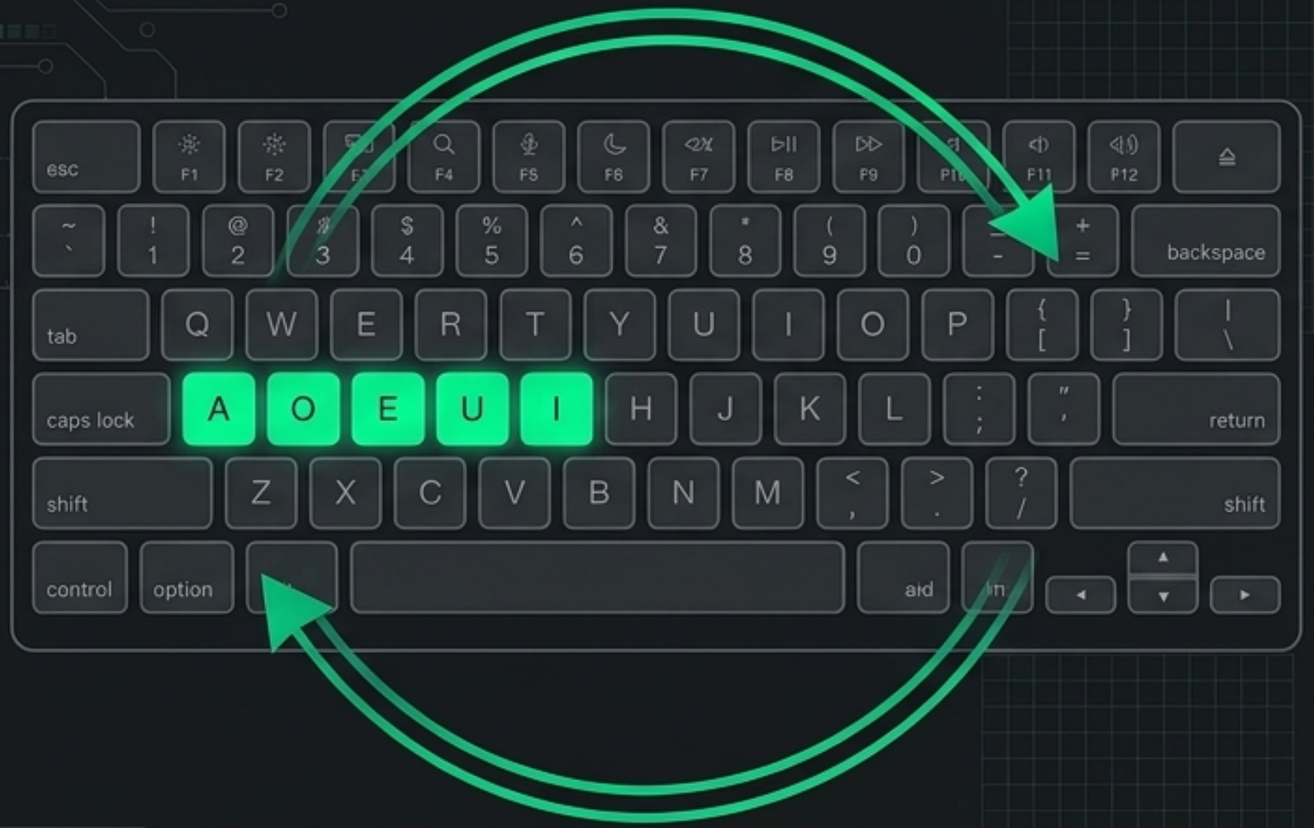
認知負荷を下げる拡張入力

二重母音や撥音節などの高頻度な文字列を、直感的かつ空間的なルールで2打鍵に短縮します。

完璧なIME親和性

物理キーボードの配列は変更せず、ATOKやGoogle日本語入力の「ローマ字カスタマイズ」のみで完結します。

最大の恩恵：母音の集中配置による「流れるような交互打鍵」



Dvorak配列の最大の利点を和文入力に適用。日本語の基礎となる5つの母音を、最も打鍵しやすい左手ホームポジション（中段）に完全集約しました。

> 左手：母音（A・O・E・U・I）
>
> 右手：主要な子音

これにより、左手と右手がリズミカルに交差する「交互打鍵」の確率が飛躍的に向上。長文入力時の指の移動距離を劇的に削減し、手や手首への物理的な疲労を最小限に抑えます。

思考を止めない一貫性：拗音化キーの法則

理論上の最高速度（完全な交互打鍵）を追い求めて複雑なルールを課すのではなく、
AOURは「認知的な迷いのなさ」を最優先しています。

「きゃ」「にゅ」「みょ」などの拗音（ゃゅょ）を入力するための拗音化キーは、
「子音と同段の右手人差し指キー（U・J・M）」に原則統一されています。



カ・ラ・ガ・パ行（上段） ＋ 【U】 ＋ 母音

ナ・ハ・ダ行（中段） ＋ 【J】 ＋ 母音

マ・バ行（下段） ＋ 【M】 ＋ 母音

多少の同指打鍵が発生しても、ルールが極めてシンプルであるため、脳が「次の指」を迷うタイムラグが排除されます。
（※シャ【B】、チャ【V】、ジャ【C】行は例外として専用キーを配置し、更なる高速化を実現）

空間的ロジックの拡張①：二重母音の体系的配置

「かい」「そう」「てい」など、日本語に頻出する二重母音（アイ、オウ、エイ、ウウ、ウイ）を、対象となる単母音の「直上のキー」に配置しています。



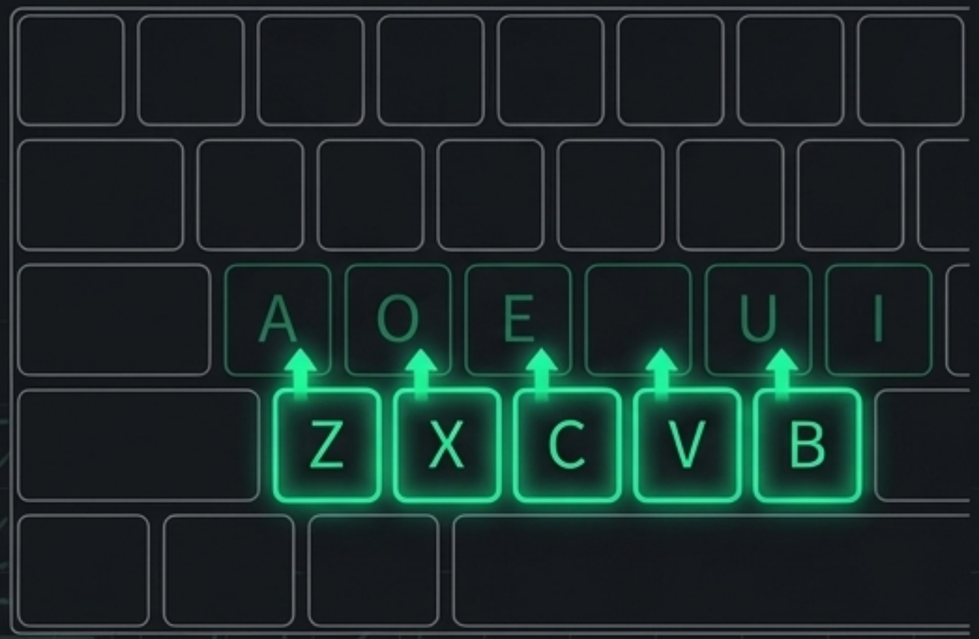
右手子音キー＋左手上段キー
＝2打鍵で二重母音完成

ア行二重母音（AI）：【A】の上＝【Q】	
オ行二重母音（OU）：【O】の上＝【W】（例：K＋W＝こう）	
エ行二重母音（EI）：【E】の上＝【E】	
ウ行二重母音（UU）：【U】の上＝【R】	
イ行二重母音（UI）：【I】の上＝【T】	

標準ローマ字で3打鍵必要な綴りを、思考の直感性を保ったまま2打鍵に圧縮します。

空間的ロジックの拡張②：撥音節の体系的配置

二重母音と同様の空間ロジックを用い、「こん」「ぐん」「わん」などの撥音節（アン、オン、エン、ウン、イン）を、対象となる単母音の「直下のキー」に配置しています。



右子音キー＋左手下段キー＝2打鍵で撥音節完成

ア行撥音節（AN）：	【A】の下＝【Z】	
オ行撥音節（ON）：	【O】の下＝【X】	（例：K＋X＝こん）
エ行撥音節（EN）：	【E】の下＝【C】	
ウ行撥音節（UN）：	【U】の下＝【V】	
イ行撥音節（IN）：	【I】の下＝【B】	

単独の「ん」キー【X】を使うことなく、高頻度な文字列を流れるように処理します。

究極のショートカット「裏打ち」：対称性を利用した省打鍵

ACT配列の優れた思想を継承し、頻出する特定の拗音節（ょう、ゅう、ゃく、ゅく、ょく、ゅつ）に対して、
さらに少ない打鍵で入力できる代替ルート「裏打ち」を用意しています。

ロジック：二重母音キーの「左右対称位置」を叩く

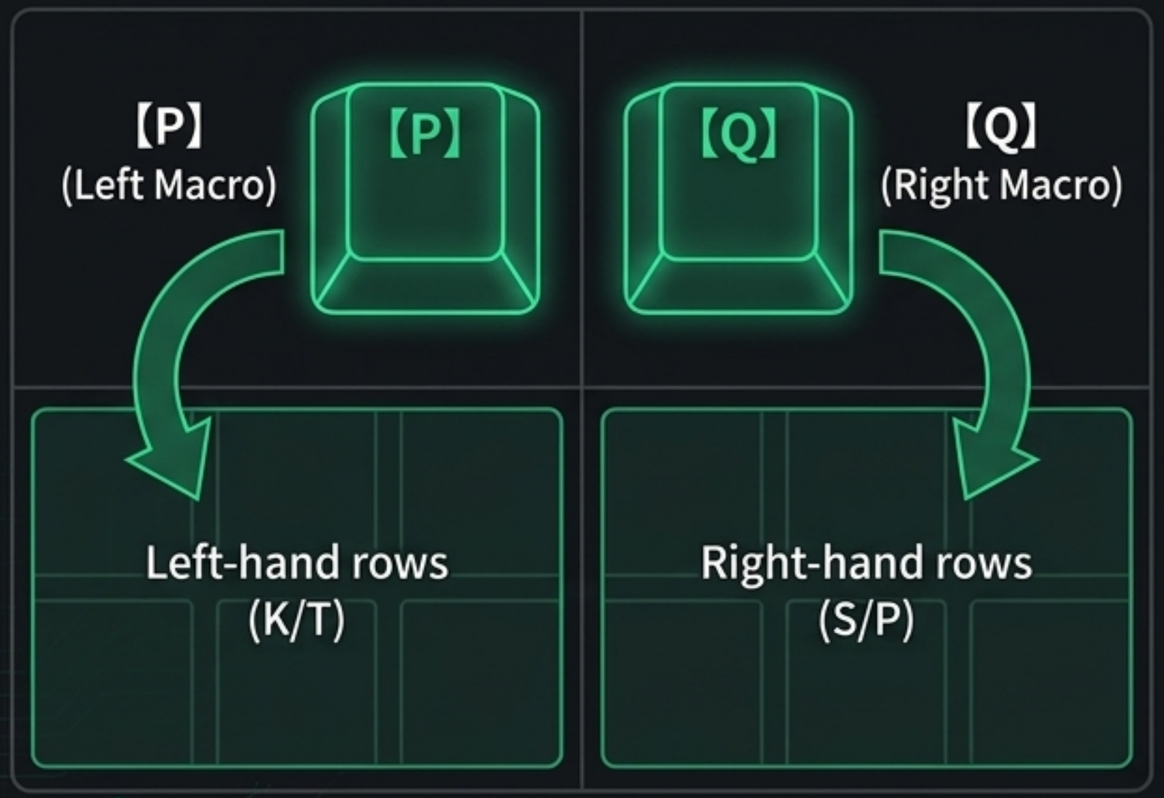
- 【I】＋【O】＝きょう　（2打鍵）
- 【L】＋【U】＝にゅう　（2打鍵）
- 【J】＋【 ;】＝ひゃく　（2打鍵）



同指打鍵を許容してでも、手数の削減と入力スピードの限界を突破するための実践的アプローチです。

促音マクロ：和語に特化した打鍵圧縮（っか、った、っさ、っぱ）

ローマ字入力における最大のボトルネックの一つである「促音（っ）」の連続を、マクロのように処理する拡張定義です。小書き文字キー【P】とその裏打ち位置【Q】を前置キーとして使用します。



【P】を起点とする拡張（カ行・タ行）

【P】＋ 左手下段 (母音空間) ＝「っか」「っき」「っく」「っけ」「っこ」
(例: P + Z = っか)

【P】＋ 左手上段 (母音空間) ＝「った」「っち」「っつ」「って」「っと」

【Q】を起点とする拡張（サ行・パ行）

【Q】＋ 右手中段 ＝「っさ」「っし」「っす」「っせ」「っそ」

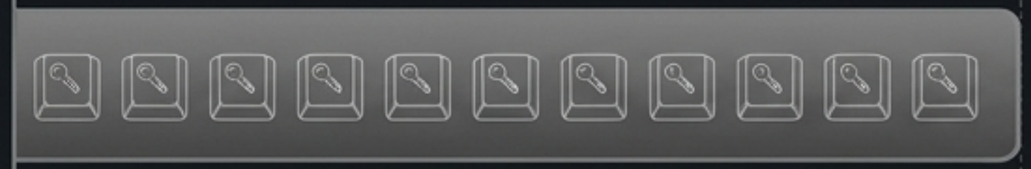
【Q】＋ 右手上段 ＝「っぱ」「っぴ」「っぷ」「っぺ」「っぽ」

「キットカット」の入力が、標準10打鍵（IGZKSIAZKS）から8打鍵（IGPWIAPW）へと短縮されます。

体系的拡張がもたらす圧倒的な「省打鍵の証明」

ここまでに解説した「二重母音」「撥音節」「裏打ち」が組み合わさることで、
単語単位ではなく、文章全体の打鍵数が劇的に削減（約17〜18%減）されます。

例1：「走行試験」（そうこうしけん）



標準ローマ字 (11打鍵)：SOUKOUSIKEN

27%削減



AOUR (8打鍵)：【;W】【IW】【;G】【IC】

例2：「工業製品」（こうぎょうせいひん）



標準ローマ字 (13打鍵)：KOUGYOUSEIHIN

38%削減



AOUR (8打鍵)：【IW】【UUW/裏打ち:IO】【;E】【JB】

疲労の軽減は感覚値ではなく、数学的な打鍵数の減少によって確実にもたらされます。

新配列マトリクス：AOURの戦略的ポジショニング

AOURは、理論上の最高速度を盲信するのではなく、「思考の迷いなさ」と「実用的な実装のしやすさ」の完璧なバランスを追求しています。

AOURの主な特徴：

- 疲労軽減度（交互打鍵）：**高**（Dvorakベース）
- 認知負荷の低さ：**高**（右手人差指の統一）
- 拡張入力の体系性：**高**（裏打ち・促音拡張）
- ATOK実装の容易さ：**最高**（完全対応設計）

Insight:
AOURは、「ATOKという最高の執筆環境で、人間の既存の習慣に寄り添いながら劇的な省打鍵を実現する」ことに特化しています。

シームレスな統合：QWERTYのインフラを1秒も犠牲にしない



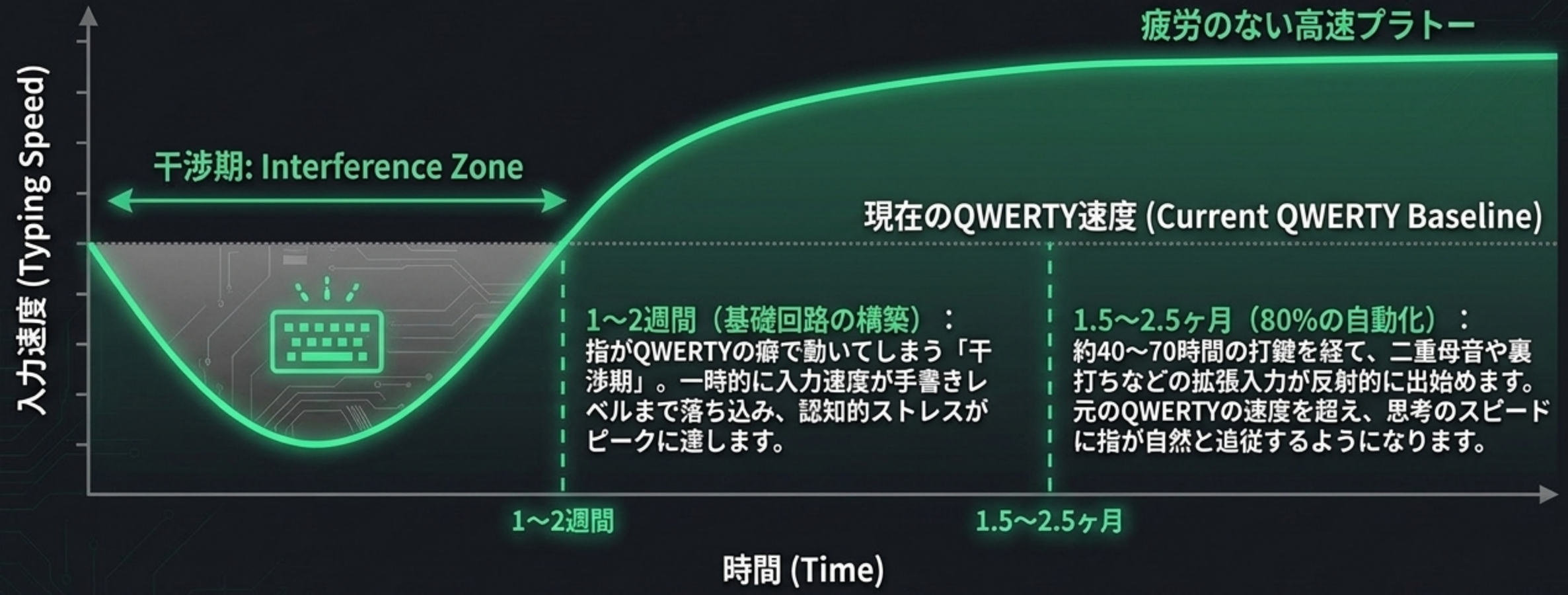
OSレベルでキーボードの配列を改造する他の新配列とは異なり、AOURは「IMEのローマ字カスタマイズ」というソフトウェア層のみで機能します。

- **物理キーボードはそのまま**：特別なハードウェアは一切不要です。
- **英数字はQWERTYのまま**：IMEをオフにすれば、完全に使い慣れたQWERTY配列として動作します。
- **脳の切り替えが容易**：プログラミング、パスワード入力、ショートカットキーの操作感を損なうことなく、和文入力の時だけAOURの恩恵をフルに受けられます。

定義ファイルを一つ読み込ませるだけで、あなたのPCが即座に最適化された執筆ツールへと変貌します。

習得への軌跡：短期的な干渉を受け入れ、長期的な解放を得る

長年QWERTYローマ字を打ってきたタッチタイピストがAOURに移行する場合、既存の運動記憶との「強烈な干渉」が必ず発生します。この学習コストを乗り越えた先に、疲労からの解放が待っています。



（※全くの初心者の場合は、運指の基礎訓練が重なるため約4〜6ヶ月を要します）

確実な習得のための 3-Step ロードマップ

膨大なマッピングを一度に暗記するのではなく、機能単位で
指に回路を構築していくことが、挫折を防ぐ唯一の近道です。



Step 1: 基礎回路の構築 (Base)

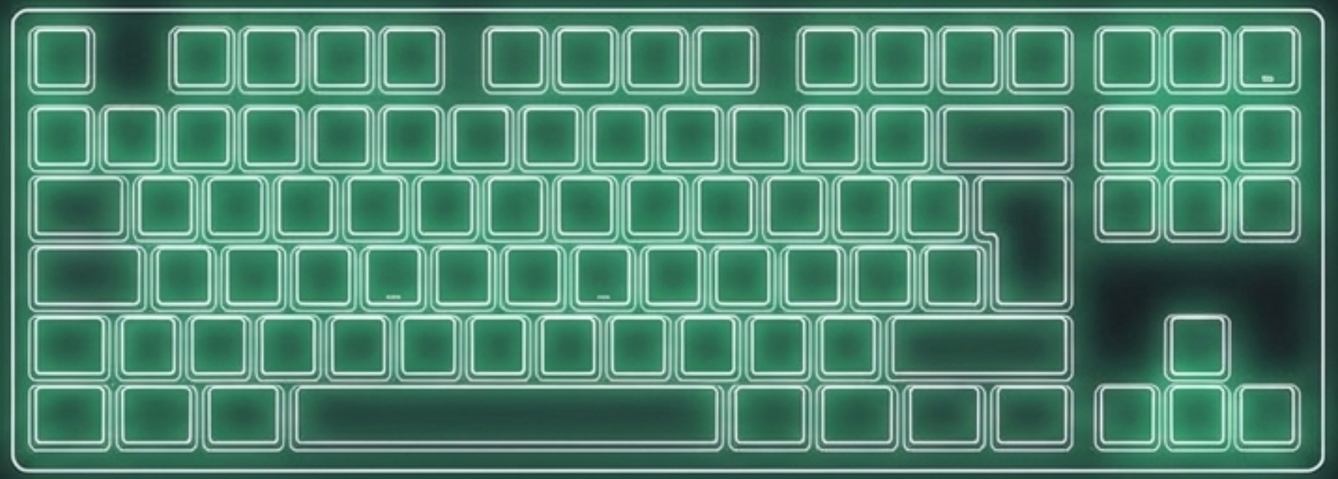
まずは左手ホームポジションの「5つの母音（A/O/E/U/I）」と、右手の主要子音を徹底的に身体に叩き込みます。この段階では拡弧張入力は意識せず、正しい運指のみに集中します。

Step 2: 拡張のインストール (Extensions)

基本が固まったら、空間ロジックに基づく「二重母音（上段）」と「撥音節（下段）」を解禁します。単語を音節のブロックで捉える脳の切り替えを行います。

Step 3: 実戦と裏打ち (Application)

チャットや短いメモ書きなど、日常の実戦投入を開始。同時に「ょう」「ゅう」の裏打ちや、促音コンボ（っか/った）を意識的に使用し、無意識の反射へと昇華させます。



ツールが透明になる時、思考だけが残る

AOURは、単なるマニアックなキー配列ではありません。
それは、あなたの「知的生産性」に対する長期的な投資です。
物理的な指の移動距離を削り落とし、
認知的な迷いを排除するように精緻に設計されたこのアーキテクチャは、
習得の壁を越えた先で、自らの存在を消し去ります。
キーボードを叩いている感覚が消え、
頭の中の言葉が直接テキストとして出力される感覚。

ATOKやGoogle日本語入力の定義ファイルをダウンロードし、
今日からその領域への移行を始めてください。